

<実践シリーズ>カウンセリング指導員として 教師の引き出し

朝日町立朝日中学校 教諭 梅澤 健一

私は1960年代生まれ、おそらく不自由なく育ってきた世代である。最近流行のゲームこそなかったが、カラーテレビなど電化製品もそろっていた。家族一緒に食事をし、家族みんなが私たち兄妹を温かく見守ってくれていたと記憶している。しかし、一般的には両親が共働きになり、だんだん子どもと過ごす時間が短くなっていく時代である。それ以降私たちの育ちの中で、物質的な豊かさが増す一方で、躰や常識、感性など人としての内面的な豊かさが損なわれてきたのではないかと今になって思う。大人(親)が自分のことで精一杯で余裕が無く、自己中心的な家族へと変化していると言われてることと何か関係があるのではないかと感じさせられる。

ただ、基本的には生徒の素直さというのは変わっていないが、生徒が身に付けていないことが、過去の生徒よりも多くなっているのではないかと思う。先ほどの話ではないが、親が身に付けていない躰を自分の子どもに教えることは難しいことである。そうであれば、学校という小さな社会の中で、「不易」と考えられる社会性の部分を教え伝えることも、教師の使命なのかもしれない。時代の流れを「流行」と考えれば、私たち教師は、社会背景や家庭環境を理解し、よりよい生徒理解、指導に繋げていく必要がある。

よく耳にする「不易と流行」だが、もう一つ大切なポイントがある。それは私たちのスタイルである。私たちは教師や大人としてのプライドをもち、自分のスタイルを確立し生徒の指導に当たってきたと思う。しかし、それを少し柔軟にしていく必要があると思う。それは、「知識・経験・情報」という引き出しをより多くもつことで、多様な生徒、保護者に対応する力を備えることができるからである。また、児童生徒はまだまだ未熟であり、問題を起こすことが多いが、その解決には、その背景にあるものを知る、探る必要があるのではないか。指導する場面で、毅然とした態度を取りながらも、生徒の心に寄り添うような発言や態度、眼差しなどが必要なのではないだろうか。教師側からの一方通行ではなく、心のコミュニケーションを通しての生徒理解や、問題行動や不適応を未然に防ぐ積極的なかわりが今後ますます必要になってくると今感じている。

<実践シリーズ>教室紹介

「キョウミドリ」だあいすき

朝日町立さみさと小学校 教諭 横山 亜希子

1学期5月連休明けに、生活科の学習で自分の好きな野菜を種まきしたり苗を植えたりしました。事前に、子どもには教科書を参考にして育てたい野菜を選ぶように話してありました。家の人と相談をしながら野菜を選んだ子どももいたようです。驚いたことには、教科書に載っていない「オレンジパプリカ」や「フルーツトマト」「キョウミドリ」を準備してくる子どもがいたのです。私は今まで、「キョウミドリ」という名前を聞いたことがありませんでした。R児から「キョウミドリ」はピーマンの仲間だと教わりました。R児は、「キョウミドリ」がなったら肉と一緒に炒めて食べるのだとはりきっていました。そのせいか、R児は愛情をたっぷり注ぎ、「キョウミドリ」を育てました。観察している様子を見ると、

- ① 毎朝、欠かさず「キョウミドリ」の水やりをしました。
- ② 背丈が伸びると支柱を立て、雨風に負けないように考えていました。
- ③ 実がなかなかつかないと、どうしてかなと考えて調べたり家の人に相談したりして自分の課題を追究する姿がありました。
- ④ 実がつくと自分の喜びを仲間や教師に伝え、自分の一連の活動の充実感を感じていました。

どれも当たり前のお世話かもしれませんが、昨年の1年生の時はこのような活動は見られませんでした。「アサガオ」と「キョウミドリ」の違いと「なぜキョウミドリを育てているのか」という思いや願いの違いから、R児の野菜に対する接し方が昨年と大きく異なったのだと考えます。彼の「肉炒め」が食べたいという思いは、何よりも彼の野菜に対する愛情を深めるきっかけになったと思います。

また、一つ一つ指示を与えなくてもR児のように「肉炒めを食べたい」という強い思いや願いがモチベーションとなり自主的に野菜とかかわることができるのだと改めて思いました。野菜のことを考え、どうすればおいしい料理が食べられるかを自分で試行錯誤しながら育てることは実感を持った学びとなりました。